

# 心理テストにおける量的アプローチと質的アプローチの関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2016-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 由嗣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18320">http://hdl.handle.net/10291/18320</a>

〔資料〕

## 心理テストにおける量的アプローチと質的アプローチの関係

高瀬 由嗣<sup>1)</sup>

### I はじめに

心理テストを分析・解釈するアプローチは、量的なものとの質的なものに大別できる。周知のとおり、前者は標準化された手続きに従って対象者の与えた回答を得点化し、そのパーソナリティの諸側面の強弱、高低、多寡等を科学的（すなわち客観的）に示す手続きである。それに対し、後者では対象者のテスト反応を子細に読み込み、その内的資質や力動的側面を深く記述することに重きを置く。臨床場面において、われわれはこの2つのアプローチをどのように使い分け、統合するのか。それは、古くから多くの理論家たちが取り上げてきた問題であるし、さまざまな論争も招いた。それゆえ、この問題をあらためて論じるのは屋上屋を架すことなのかもしれない。しかしながら、昨今はこの2つのアプローチをめぐる、さまざまな動きが生じているのも事実である。例えば、質的な方法から脱却をはかり、量的アプローチを志向した投映法が、今世紀に入ってから、あまりにも偏狭な科学主義から激しい批判にさらされたのは記憶に新しい。その一方で、コンピュータ活用などの技術革新に伴い、質的アセスメントの領域にも新たな発想に基づいた分析・解釈法が導入されつつもある。このような変化の途上にある今だからこそ、敢えてこの問題を取り上げる意義もあ

ろう。そこでこの小論では、これまでの重要文献と筆者自らの臨床経験を踏まえて、心理テストにおける量的アプローチと質的アプローチの位置づけを再吟味するとともに、この2つをいかに有効に活用するかについて論じる。

### II 量的アプローチの特徴

周知のとおり、心理テストは、対象者の能力や心的特性の存否や程度を一定の基準に照らして明らかにすることを目的とする。言うまでもないが、心理学で扱われる概念の大半は、不安、抑うつ、衝動性、価値観、知能といったような構成概念であり、直接観察することはできない。それゆえ、これらの程度を誰の目にもはっきりと見える形で示すために、さまざまな特性に数値が割り当てられ、量的に記述されることがある。端的に言えば、これが計量心理学的方法、すなわち量的アプローチである。

古典的テスト理論に基づくならば、心理テストとは、信頼性（尺度として安定した数値を示せること）、妥当性（ターゲットとする心的特性や能力を間違いなく測定していること）が検証され、標準化（規準に基づき各人の与えた結果を相対化できること）の手続きを経ているなければならない。それは、かなり厳密な手続きのもとで行われる。

1) 明治大学 文学部心理社会学専任准教授

このようなプロセスを経て開発された心理尺度からはじき出される数値の特徴とは何か。ある対象者が不安を測定するある心理テストに回答したところ、T得点で50点であったとする。すると、この人の不安は中程度であると判断される。この50という数値にテスト実施者の主観の入り込む余地などまったくない。それゆえに、客観的であると言える。また、得られた数値には明確な根拠があることを踏まえるならば、それはevidence basedと言うこともできる。このような特徴を兼ね備えているがゆえに、量的アプローチは、「統計的」「科学的」方法とすることができる。あるいは、一般的・普遍的な法則（規準）に基づいて対象者を記述するという点に立てば、「法則定立的 (nomothetic)」（ヴィンデルバント，1940）と見なすこともできよう。

ところが、いざ心理テストの報告書を書く段になると、客観的・科学的であろうとすればするほど、それに相応するように、対象者の描写は深みに欠けるものとなる。もちろん、客観的・科学的であることは重要である。対象者の状態を冷徹な態度で見立てるからこそ、より適切な臨床心理学的援助が可能になる。しかし、その態度が行き過ぎると、極端な場合は、対象者を得点でしか言い表せなくなる。そこまでいくと、被検査者のパーソナリティ特徴をもはや何も語っていないのと等しい。

果たして、客観性を重視して深みにかけるレポートを書き上げるか、それとも多少客観性を犠牲にしても、踏み込んだ解釈を行うべきか。心理臨床家には、こういった難しい問いが常に投げかけられる。

### Ⅲ 質的アプローチの特徴

次に質的アプローチの特徴とそれが内包する問題を検討する。まず質的アプローチを定義しておく。それは、対象者が与えた答え（反応）について、様々な質的な手掛かりに注意を向けながら、対象者の行動や性格の特性、精神力動の側面を直観的に記述していく方法を指す。反応の質を唯一無二の個性の反映と捉えるならば、それは「個性記述的 (ideographic)」（ヴィンデルバント，1940）な試みと言い換えることもできるであろうし、対象者の内的資質や力動的な側面を直観的に読み取っていくという点に注目するならば、現象学的な接近と言うこともできよう。

ここでは投射法の解釈を例に取り、質的アプローチの実際を見てみたい。はじめに取り上げるのは投射法の代表格ロールシャッハ・テストの例である。以下は、片口（1987）が三島由紀夫のプロトコルを解釈した一部である。

カードVの自由反応段階において、「死にかけ、しおたれたガ」と言い、さらにその質問段階で「ガというのは、羽がプワプワになっちゃって、ガボガボになっている。雨なんかに打たれて…」と言っているのは注目すべきである。このような形で、彼は弱々しく衰退した自己像の一旦をふとのぞかせているのかもしれない。他方、カードIでは「カブト虫」を与え、その質問段階で「スカラベなんか割に好きなんで…」と述べており、これは彼のもう1つの自己像、すなわち甲冑に見を固めた隙のない人間像の投射とみてもよいように思う。ここにわれわれは、彼の極端に対照的な自己認知の様相を感じないわけにはゆかない。これらの反応は、自然でありのままの生き方が、困難であることを示していると言ってよからう（片口，1987，p.404）。

片口は、もともとはロールシャッハ・テストの質的な解釈を重んじたKlopperをベースにして、一般に「片口法」と呼ばれるロールシャッハ体系を発展させた人であるが、やがて、その現象学的な解釈から距離を置くようになった。晩年には自らの体系を「次第にクロッパーの方法から離れてゆき、ある面では、むしろベック法に接近していった」と評したほどである（片口, 1993, p. ii）。そのような量的志向性を持っていたのにも拘わらず、上に示した解釈はすぐれて現象学的である。

次に同じく投射法に位置づけられるTATを取り上げる。以下は、TATの第1カード（そこには、頬杖をつき深く思い悩んだような表情で、机の上に置かれたヴァイオリンを眺める少年像が描かれている）に与えられた対象者B氏の反応（物語）を、高瀬（2012）が解釈した事例である。少し長くなるが、反応プロトコルの抜粋ならびに解釈を引用する。

#### 【図版1 反応】（抜粋）

この子どもは両親が大切にしていたヴァイオリンを壊してしまった。そして、どういふふうにして謝ろうと、どういふ風な言い訳をしようかと悩んでいる。…<これから先は？>父親、母親に正直に言って、「ごめんなさい」と謝って、あとは、もう、どういふふう怒られるか、というところでしょうか。…<他に何か付け加えることは？>物凄く高価なヴァイオリンであったと…あの、ストラディバリウスのような逸品、名器。それだけ悩みが深いように思います。

#### 【図版1 解釈】

典型的な反応である。その意味では、B氏はある程度常識的にものごとを捉えることのできる力を有しているといえるであろう。しかし、反応を一読してわかるとおり、少年はヴァイオリンを自らのものとして所有してはいない。

それは、決して手の届かぬ高嶺の花（ストラディバリウス）なのである。ここに彼の自己矮小感、あるいは無力感が表れていると解釈される。この自己矮小感・無力感はただ「怒られる」のを待つだけの少年像にも表れていよう。ところで、この反応を別の視点から捉えるならば、両親は、高価な名器を所有しつつも、それを決して子どもに与えない人たちであると読むことができる。それは、彼が抱く保護者像を表しているのであろう（高瀬, 2012, p. 205）。

上では、対象者が抱く自己像のみならず、両親像までもが検討されている。片口の見事な解釈と比ぶべくもないが、それでも現象学的な接近という点では同じである。

この2つの例が示すとおり、質的アプローチにおいては、パーソナリティのかなり深い面まで踏み込んで検討されるのが大きな特徴である。さらに、たった1つ（あるいは、ごく少数）の反応から実に多岐にわたった解釈が展開されるのも、その特色の一つに数えても良いであろう。このような解釈は、ときに見過ごされてしまうような細かな材料にも平等に目を向け、そこに意味を見出し、それらを有機的に統合してパーソナリティ像を組み立てていくため、ときに「職人芸」と評されることもある。

言うまでもないが、質的なアプローチとは、やみくもに思いつきの「解釈」を並べ立てることではない。推論はあくまでも合理的なものでなくてはならない。さらに、推論の正しさを裏づける証拠を探し出すことも大切である。例えば、継起分析とよばれるロールシャッハ・テストの質的アプローチのガイドラインを策定したPeebles-Kleiger（2002）は、解釈の妥当性を高めるための方策として、ある材料から引き出された仮説がテスト内の他の材料からも裏づけられるかどうか（テスト

内収束)、場合によっては他のテストからも検証されるか否か(テスト間収束)を見きわめるのが重要だと説く。また、本邦におけるTAT研究の第一人者である鈴木(1997)も、TAT反応の解釈の要諦として、これと同様の見解を示している。すなわち、「いくつかのカードの反応からのそれぞれ独立の推論が一点で交われれば、推論は正しく、推論されたものの存在は確実である」というのである(鈴木, 1997, p. 13)。

このようにして収集された質的な材料は、対象者を深く知るうえで、また面接や心理療法などの援助を導入した際に扱われるべきテーマを把握するうえで、きわめて重要な意味を持つのは論をまたない。しかし、たとえ、ありとあらゆる材料に目を配り、証拠をかき集めながら慎重に推論を重ねていっても、量的アプローチに比べれば、科学的な根拠には乏しい。なぜならば、それは検査者の知識や経験に裏打ちされた直観的な解釈だからである。それゆえ、いくら説得力のある解釈レポートを作成したとしても、極端な客観主義者にしてみれば、それは主観的な作文にしかみえないであろう。

次節では、この職人芸的な質的アプローチから脱却し、量的アプローチを志向した投映法を取り上げ、このような投映法が登場した歴史的背景と、それに対して巻き起こった批判について論じる。

#### IV 投映法にみられる量的アプローチとそれに対する批判

1960年代の米国は、5人の大家が創始したロールシャッハ体系(Beck式, Hertz式, Klopfer式, Rapaport式, Piotrowski式)がまさに群雄割拠しているという状況であった。それぞれが独自の人間観、方法論、そして言語を有していたため、各

体系間をつなぐ共通のアプローチというものは存在しなかった。それがロールシャッハ・テスト自体の衰退を招く原因となることを危惧したExnerは、この5つの体系を、実証性に耐えうる形で統合することを試みた。包括システムと名付けられた彼の方法は、1974年の初版後、たびたびの改訂を経て、やがて米国におけるロールシャッハ体系の主流へと成長していった(Exner, 2003)。

米国の医療や司法領域において、包括システムがもっとも頻繁に用いられていた1990年代後半から2000年代初頭にかけて、この方法に対する激しい批判が巻き起こった。その中心メンバーは、もともと投映法に懐疑的であった心理学者や、かつてはロールシャッハ・テストを頻繁に用いながらも、その方法に限界を感じた臨床心理学者たちである。これらの人々がテストに対して投げかけた一連の批判は一冊の書籍にまとめられ、“What's wrong with the Rorschach?(邦題:「ロールシャッハテストはまちがっている」)”という刺激的なタイトルで2003年に上梓された(Wood, Nezworski, Lilienfeld, & Garb, 2003)。

同書の内容については、本邦でもすでに他の文献の中で取り上げられているので(高瀬, 2013)、それを長々と繰り返すような愚は避けたい。それゆえここでは特に重要な点だけを紹介する。まず押さえておきたいのは、タイトルには「ロールシャッハテスト」とははっきりと示されているのにも拘わらず、著者らの批判はロールシャッハ・テストそのものというよりは、もっぱら包括システムの方法論に向けられていたという点である。その第一の批判が、「過剰病理化(overpathologizing)」の問題である。すなわち、包括システムの指標の中には精度が高くないもの——換言すれば妥当性が保証されていないもの——が相当の割合で含ま

れており、それらが往々にして対象者の病理を重めに見積もるといっているのである。第二が、規準 (norm) にまつわる問題である。規準とは、本来ならば個人々の特性を検討するうえで基礎となるべきデータである。ところが、包括システムではそのデータ抽出に偏りがあったり、データの一部が重複していたりして、必ずしも規準としての役割を果たしていないという。なかでも規準を構成するデータが特に健康度の高い人ばかりに偏ったため、これと比較されると、実到大勢の普通の人々が精神的に不健康であると見なされやすくなるというのである。さらに第三の批判として、反応数 (R) が各指標の得点に多大な影響を及ぼすといった構造的な弱点も取り上げられた。例えば、病理性を示す各種指標得点は、Rの増加に伴い明らかに上昇する。とするならば、包括システムでは、反応数の多い生産的な人ほど、病的と評価されやすいという矛盾をはらんでいることになる。

そもそも包括システムを構築したExnerの動機はインクのシミに与えられた答えの解釈技法 (アート) を心理テスト (科学) に切り換えることにあった。それゆえに彼は、実証性を第一義とし、信頼性と妥当性を高めることに多大なエネルギーを注いだ。この、まさに科学的であろうとする彼の姿勢に対して——Woodらの書名の副題が示すとおり——科学の見地から異議が唱えられたのは、皮肉と言わざるを得ない。

Woodらの文章は、舌鋒鋭く、攻撃的な言辞に彩られているため、特にロールシャッハ・テストを擁護する立場の読み手にしてみれば、冷静さを失いがちになる。しかし、その主張を注意深く読み込んでみると、中には至極もつともな批判も含まれている。事実、少なくとも上に示した3つの批判に関しては、包括システムの擁護者であって

も認めざるを得ないところであった。後に5名の気鋭の研究者たちが、Woodらの批判に応えるべく、包括システムの各種変数・指標の妥当性や規準の全面的な見直しを図り、Exnerの死後にR-PASと呼ばれる新たなロールシャッハ体系を作り上げたのはその象徴的な出来事といえよう (Meyer, Viglione, Mihura, Erard&Erdberg, 2011; Meyer&Eblin, 2012)。

ところで、このような批判を招いたのは、筆者には、Exnerが頑なに量的アプローチに固執したことにもその一因があるように思われる。彼の量的アプローチへのこだわりは、1991年の論文にかなり色濃く出ている。彼は、人間運動 (M) 反応にはさまざまな内容、質があることを認めつつも、5つのMを与える人は4つのMを与える人よりも、特定の性格傾向が強いことを「データは支持している」と明言するのである (Exner, 1991 p. 40)。このあまりにも統計偏重の姿勢には、ロールシャッハ・テストの研究者側からも疑問が呈された (Kramer, 1991a; 1991b)。Kramerは、次のような言葉でExnerの方法を批判するとともに、ロールシャッハ・テストの本質をえぐった。「例えば、ある人がIVカードで“いちばん下の小さな男の人が、世界を維持していて、彼は緊張の中で震えて縮んでいる”と報告したとするならば、その人は、IIIカードで“2人の人”やVIIカードで“互いに話し合う女性”を見る人よりもM的 (人間運動反応的 ≡ 内向的) な人である」 (Kramer, 1991a, pp. 33-34)。確かに、この例に挙げられているような過剰に装飾されたM反応を、ありふれたM反応と同等にIMと見なすことは必ずしも適切ではない。ロールシャッハ・テストでは、反応の量だけではなく、その質に着目することによって、ようやく対象者の本質に迫れる場合が多々あ

る。

しかし、このような指摘を受けても、包括システムは、相変わらず量を扱うことに拘泥した。ロールシャッハ反応は質的なデータであるのにも拘わらず、このシステムにあっては、あくまでもそれを量として扱うことが徹底されたのである。そして得られた結果を一定のルールにのっとって処理するならば、誰がプロトコルを検討しても一定の解釈結果に逢着すると主張した。まことに逆説的ではあるが、この行き過ぎた統計偏重の姿勢、そしていくぶん楽観的ともいえる過度に単純化された法則定立的な方向性に、科学から批判の目が向けられたとみるのもあながち間違いではないであろう。

#### V 質的アプローチと量的アプローチの関係

この問題を考えるにあたって、再びヴィンデルバントの提唱した個性記述的 (ideographic) と法則定立的 (nomothetic) の概念を取り上げたい。そもそもヴィンデルバントは、法則定立を自然科学の方法論として、個性記述を歴史学や心理学などの「精神科学」の方法論として位置づけた。そして、彼は「法則と事件とは我等の世界観においては飽く迄対立するものである」と述べ、この2つのアプローチは峻別されると説いた(ヴィンデルバント, 1940, p.36)。しかしながら、その一方で、「確かに個別的生起の因果的説明は件の生起を普遍的法則に還元することに依って、現実的生起の歴史的・特殊的構成をも事物の普遍的合自然法則に據(よ)って理解することが究極に於いて可能でなければならぬと言う思想を暗示しはする」(同, p.33) という記述も見受けられる。つまり、対象の個性・特殊性は、普遍的な法則に照らすことによって、はじめて適切に理解される、

というのである。実は、ヴィンデルバントの著書には、この内容に類する記述が他にも散見される。

ここに書かれたことは、心理テストの解釈においてもきわめて大きな意味を持つ。例えば、次のようなケースを想定したい。ある対象者が、TATのカード15(このカードには、十字架が立ち並ぶ墓地の中で、年老いた性別不詳の人物が、一つの十字架を前にして、自らの両手を合わせるようにしながら立ち尽くしている場面が描かれている)に、以下の物語を与えた。「男の人はこのお墓の中にいる人を殺した人で、懺悔しているところです。この人は、ほんとは気が小さくて人殺しとかできるタイプじゃないんですけど、カッとなって殺しちゃった。殺した相手は顔見知りの人。顔見知りだったから良心が痛んだ」。この反応が対象者自身の個性から生じたものであることは言うまでもない。では、ここから何が読み取れるのか。「カッとなって殺し」てしまうような衝動性であろうか、それとも良心の呵責を経験できるだけの心理的成熟であろうか。実は一般的な反応頻度に照らすと、殺害した相手の墓の前で自らの罪を悔い改める、といったテーマは健康な成人のグループではかなり高頻度に出現する(鈴木, 1997)。つまり、上は一見意味ありげな物語のようであるが、規準に照らせば「ありきたりな物語」(Rapaport, 1946)に他ならないのである。したがって、ここからは、比較的常識的なものが見方ができる、ということ以外に特別な意味を読み取ることはできない。

では、同じくカード15に対して、次のような物語が作られたときはどうか。「これはお墓で、亡くなった方をさうとう前から憎んでいた。…そういうことで、ある時ひそかにピストルを持って…まあ、死んでるんですけど、それにしても恨み骨

髓といますか。そういった意味で、死体であってもピストルで撃って、憂さを晴らしてやろうとする。そんな寂しい心の持ち主です」(高瀬, 2012, pp. 198-199より一部を抜粋して引用)。この物語のエッセンスを抽出すると、死者に向けられた生者の怨念、ということになろう。そこで、先の出現頻度表を参照すると、この種のテーマを持った物語は健康な成人のグループではほとんど出現しないことが確認される。わけても、たとえ死者であろうと憂さを晴らしのためにピストルで撃つ、という凄まじい内容は、この対象者だけに認められる特異な物語といえる。こういった形式的なプロセスを経ることにより、ようやくこの対象者に特異的に認められる、著しい被害感、執着性、そして攻撃性が読み取れるのである。

さて、例が少々長くなったが、筆者がここで強調しておきたいのは、対象者の個性を的確に記述しようとするならば、まずは反応の標準を押さえねばならないということである。言い換えると、標準と比べて当該の反応はどのように異なるかを子細に分析することによって、はじめて対象者の個性が浮き彫りにされる。ここでいう標準とは、むしろ量的なデータによって提供されるものである。それは上の分析例に端的に示されている。そのように考えてくると、法則定立的方法と個性記述的方法、すなわち、量的アプローチと質的アプローチは、少なくともテスト反応の分析・解釈にあっては、決して「対立」するものではなく、相補的な関係にあることが見えてくる。

## VI 質的アプローチによる解釈の妥当性を高めるための科学的方法

本節では、質的アプローチをより有効に活用するために、その解釈の妥当性をいかにして高める

かについて考える。その手がかりとして、まず前節ではテスト反応の標準(すなわち、量的側面)を押さえておく必要性を論じた。つまり、当該の反応の個別性・特異性を理解するために、一般的な反応のあり方と比較するという点である。もちろん、これはいかなる心理テストの場合も基本とすべき姿勢である。しかし、それだけでは解釈はできない。そもそも、質的なデータの場合は、データのどのような点に着目して標準との比較を進めたら良いのか見当をつけにくい。さらに、当該の反応が標準から大きく外れていることが分かったとしても、そこにどのような心理学的な意味があるのかわからない。この問題をどのように捉えたら良いのであろうか。

ここで、心理テストから少し離れたところから、この問題を考えてみることにする。医学の領域ではさまざまな疾病の診断に画像を用いることは周知のとおりである。いうまでもなく、CTやMRIなどの画像を利用すれば、そこに病巣が映し出される可能性は高い。それゆえ、画像診断は究極のevidence basedということになろう。では、医師であるならば、誰もが容易に画像診断ができるのかといえば、必ずしもそうではない。実際、画像から病気を見つけ出すには、知識と経験がものを言うようである。例えば肺がんの場合、良性結節との鑑別を念頭におきつつ、画像の「陰影の大きさや性状などから肺がんの可能性が高いか否かを判断する読影能力」が求められる。それゆえに「実臨床にて多数の症例を読影する経験が必要」とされる(大沢, 2013, p. 201)。

この記述からも明らかなように、画像診断は、定量化することの困難な質的なデータを取り扱っている。その意味においては、投映法の反応(例えば、ロールシャッハ・テストやTATに対して



与えられた答えや描画など）と基本的に同じ性質を持っているといえよう。もちろん、画像は対象者の健全さや病理を直接的に映し出すのに対して、投映法では間接的に表現されるという点では異なる。しかし、対象者自身の操作が加わりにくいやり方で、これらを目に見える形で表すという点では、両者は共通しているといってよからう。

ではここで、経験を積んだ医師が、画像診断においてどのようなプロセスに従って診断を確定するのかを考えてみたい。おそらく画像中にその医師なりの点検箇所が複数あるのだろう。医師は、それまでに健康な人から病気の人に至るまで、数多くの画像を見ている。そこで、自らが定めた点検箇所について、当該の画像と記憶として蓄えられた過去のデータとを照合し、あらゆる可能性を取捨選択しながら、診断を行うのであろう。このように、経験に裏打ちされた、精度の高い意思決定のプロセスこそが職人芸である。

もちろん初学者が職人芸の域にまで達するまでには、相当のトレーニングを積みねばならないだろうし、たとえトレーニングを積んでも、うまくいかない人もいる。残念ながら、職人芸は誰もが平等に身につけられるものではないであろう。それでは、経験やセンスがなければ、ベテラン医師のような診断はできないのか。この問いについては、おそらく否である。昨今は、コンピュータのデータベース機能を活用することにより、職人芸と同じ推論のプロセスを経て、精度の高い診断が可能になったからである。例えば、大沢（2013）の開発したシステムでは、いま診断の対象となっている画像について、過去の症例データベースから病変の画像の特徴が類似した症例を検索し、似ている順に表示するという方法が取られる。このシステムを用いるならば、いま問題としている画

像が、どのような病気の人に多く認められるものであるかが即座にわかる。また、それは同時に画像の特にどの点に注目したらより高精度の診断につながるか、という情報の獲得にもつながる。つまり、コンピュータが、診断者の知識と経験を補ってくれるという訳である。

実は、ロールシャッハ・テストや描画法といった投映法の領域にも、これと同じ発想をした研究がある。佐藤忠司が長年にわたる研究成果をまとめ、2004年に発表した『臨床心理査定アトラス』がそれである（佐藤，2004）。彼は、あらゆるタイプの人から得られたロールシャッハ・テストの情報をコンピュータの中に少しずつ保存し、やがて、それを膨大な量の情報が蓄積されたデータベースへと発展させていった。佐藤のシステムでは、いま問題となっているロールシャッハ・プロトコルについて、幾つかのポイントを定めて検索すれば、それと類似する反応パターンを示す人が、どのような種類の病理群、あるいはどのようなパーソナリティ傾向を持っている人たちに出現しやすいのかを即座に返してくれる仕組みになっている。

筆者が知る限り、投映法の分析・解釈でデータベースを積極的に活用している例は、ほとんど存在しない。これまで投映法の領域でコンピュータを活用したものと言えば、村上・村上（1988）に代表される「自動診断」が主流だったからである。つまり、かつてコンピュータは、対象者のパーソナリティ特徴を直接的に提示することを目的に利用されてきた。それに対して、佐藤（2004）の「アトラス」は解釈レポートの出力を直接目的としない。このような反応を与える人は、「○○のような傾向がある」「次に△△のような傾向もある」と確率論的に可能性の高い対象者像を順に

ユーザーに提示するのみである。しかし、その情報は膨大な量のデータに裏打ちされた精度の高いものである。ここから読み取れることは、間違いなく自動診断よりも豊かである。しかも、「アトラス」においては、検索をかける際、幾つかの条件を入力するのであるが、それはロールシャッハ・プロトコルという質的なデータを効率的かつ高精度に処理するために、そのどこに着眼すべきか、というヒントをも提供してくれる。

本節で例示した、画像診断の補助、あるいはロールシャッハ・テストの解釈の補助で用いられるデータベースは、本来ならば質でしか捉えられないものを、膨大な量のデータを背景としてその意味づけを可能にする仕組みである。実は、こういった発想は、犯罪者プロファイリングの領域では従来から重んじられてきた。すなわち、犯行の現場に残されたさまざまな痕跡、犯行の場所、被害者の特徴などの情報を、これまでに蓄積された膨大な犯罪者データベースに照らして、犯人像を絞り込んでいくという科学捜査法がこれに当たる(Rossmo, 2000)。これは質的アプローチと量的アプローチの相補的な利用といえるであろう。そしてこのような発想に基づいたコンピュータ利用が心理テストの分野にもさらに広がるならば、それはテストの解釈の妥当性を高めるための有力な科学的方策となろう。

## VII 量的アプローチから質的アプローチへの接近

最後に、公刊された心理テストの報告書を例に取り、科学的な手続きによって構成された心理テストの中にも、質的な記述がしっかりと根づいていることを示しておきたい。例えば、高山(2002)は、YG性格検査において次のような解釈を示した。

「このプロフィールを因子レベルで見えていくと、同じ因子群であるR(のんき尺度)とG(活動)尺度の粗点に大きな相違がある。つまり、きわめて活発で積極的でありながら、その反面、過度に自己拘束的で、ゆったりしたところがないといった特徴がうかがえるのである。それは、適応上かなり無理があることを示している」(p. 121)

これは、YG性格検査における分析法の1つである、因子レベルの分析で明らかになった特徴である。このレポートの対象者は、YG性格検査のプロフィールで比較的健康度が高いとされるD型を与えたのであるが、高山は各尺度得点の高低を細かくチェックすることによって、一見健康そうに見えるパーソナリティにも、かなり息苦しい面があることを見事に見抜いたのであった。このような解釈は対象者の与えた結果にかなり踏み込んで、対象者自身になってみる(つまり、共感することによって可能になることなのかもしれない。その意味では本例は、量的アプローチに基づいた質問紙法の解釈であっても、現象学的といえる。

次にもうひとつ、安住(2005)は、ADHD傾向をもった男児に対して実施されたWISC-IIIの結果から、次のように考察した。

「POの低さが目立った。…(中略)…特に「絵画配列」以外の「絵画完成」「積木模様」「組合せ」が低いことから、本児は同じ視覚刺激であっても、一度に多くの情報を処理する「同時処理能力」に弱さをもっていると推測された。…(中略)…指摘されたことを批判されたと過敏に反応してしまうことも、相手のことばやアクションの一部のみに反応し、状況全体を把握できていないこと…によると考えられた」(pp. 137-139)

このレポートは単に知能検査の得点をただ羅列しただけのものではない。下位尺度の得点のあり方から特に同時処理が苦手であることを看破したのである。対象者の与えたさまざまな情報のうち、何に注目するか、そしてその断片的な情報を有機的に結合させ、いかに生きたパーソナリティ像を描くかは、まさに経験に裏打ちされた、「直観」(=主観)によるところが大きいのである。

確かに、客観的・科学的態度で対象を眺めることは、対象を適切に評価するうえで、もちろん大切である。しかし、それだけでは十分ではない。心理アセスメントにおいて、生きたレポートを行い、援助活動に役立てていくためには、質的アプローチが重要であることが改めて確認できよう。

「量的アプローチ」と「質的アプローチ」は、言うなれば車の両輪である。量的アプローチはパーソナリティ像の骨格部分を作り上げ、質的アプローチはその肉づけ作業を請け負うとも言おうか。このように双方のやり取り取りがあるからこそ、そこから引き出される情報はより立体的な像をなすのである。それゆえ、この2つのアプローチはどちらか一方が欠けても、有効なアセスメントとはならない。つまり、この2つを相補的に用いてこそ、意味のある仕事ができるといえるであろう。

## 文献

安住ゆう子 (2005). 事例7 多弁で対人関係のトラブルが多い小学校4年生. 上野一彦・海津亜希子・服部美佳子編. 軽度発達障害の心理アセスメント: WISC-IIIの上手な利用と事例. 日本文化科学社. 135-141.

Exner, J. E. (1991). Comments on "the Rorschach M response: a return to its roots". *Journal of*

*Personality Assessment*, 57 (1), 37-41.

Exner, J. E. (2003). *The Rorschach; A comprehensive system: Vol. 1. Basic foundation and principles of interpretation* (4th ed.). New York: John Wiley & Sons, Inc.

片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.

片口安史 (1993). 監修者のことば. 片口安史監修, 藤岡新治・松岡正明著. ロールシャッハ・テストの学習: 片口法スコアリング入門. 金子書房. i - ii.

Kramer, R. L. (1991a). The Rorschach M response: A return to its roots. *Journal of Personality Assessment*. 57 (1), 30-36.

Kramer, R. L. (1991b). Response to Exner's comments on "The Rorschach M response: A return to its roots". *Journal of Personality Assessment*, 57 (1), 42-45.

Meyer, G. J., & Eblin, J. J. (2012). An overview of the Rorschach Performance Assessment System (R-PAS). *Psychological Injury and Law*, 5, 107-121.

Meyer, G. J., Viglione, D. J., Mihura, J. L., Erard, R. E., & Erdberg, P. (2011). *Rorschach Performance Assessment System: Administration, coding, interpretation, and technical manual*. Toledo: Rorschach Performance Assessment System.

村上宣寛・村上千恵子 (1988). ロールシャッハ・テスト—自動診断システム (ソフト). 日本文化科学社.

Peebles-Kleiger, M., J. (2002). Elaboration of some sequence analysis strategies: Examples and guidelines for level of confidence. *Journal of Personality Assessment*, 79 (1), 19-38.

- 大沢哲 (2013). 肺がんの画像診断を支援する類似症例検索システム「SYNAPSE Case Match」の開発. 電子情報通信学会技術研究報告. MI, 医用画像, 112 (411), 207-209.
- Rapaport, D. (1946). The Thematic Apperception Test. In D. Rapaport, *Diagnostic psychological testing*, Vol. 2. Year Book Medical Publishers: Chicago. pp. 395-459.
- Rossmo, D. K. (2000). Geographic profiling. Boca Raton, FL: CRC Press.
- 佐藤忠司 (2004). 臨床心理査定アトラス—ロールシャッハ, ベンダー・ゲシュタルト, 火焰描画, バッテリー. 培風館.
- 鈴木陸夫 (1997). TATの世界：物語分析の実際. 誠信書房.
- 高瀬由嗣(2012). TATが映し出すパーソナリティの諸側面：ロールシャッハ・テストとの比較を通して. 中京大学心理学研究科・心理学紀要, 12 (1), 193-221.
- 高瀬由嗣 (2013). ロールシャッハ・テスト. 八尋華那雄監修, 高瀬由嗣・明翫光宜編. 臨床心理学の实践：アセスメント・支援・研究. 金子書房, 49-75.
- 高山巖 (2002). 矢田部ギルフォード性格検査. 上里一郎編, 心理アセスメントハンドブック. 星和書店, 111-122.
- ヴィンデルバント著, 篠田英雄訳 (1940). 歴史と自然科学・道徳の原理に就て・聖：「プレルーディエン」より. 岩波文庫.
- Wood, J. M., Nezworski, M. T., Lilienfeld, S. O. & Garb, H. N. (2003). *What's wrong with the Rorschach: Science confronts the controversial inkblot test*. Jossey-Bass: San Francisco.

## Relationship between Quantitative and Qualitative approaches in the Psychological Tests

Yuji TAKASE